

月の法善寺横丁

No.315

十二村 哲 — 作詞
飯田 景応 — 作曲
藤島 桓夫 — 唄

Am Dm Am E7

E7 Dm E7 E7 Am

E7 Am Am E7 Am

ほうちょうい っ— ぼん さらしにま い— て
うでをみが い— て なにわにも ど— りゃ

Dm Am E7 Am E7

たびへでるの— も— いたばのしゅ ぎょ— う まって て こ いさ ん
はれてそわれ— る— なかではな い— か おねが い こ いさ ん

Am E7 Am E7 Am Dm Am

かなし い だ ろが あ — — — わかいふた り— の —
なかつ に お くれ あ — — — いまのわて に— は —

Am Am E7 Am E7 Am

おもいでに じむ ほうぜんじ つ き も み れん な — じゅうさ—ん— や
おやかたは んに すまないが あ じ の れん にゃ — は が た—た— め

月の法善寺横丁

十二村 哲 作詞
飯田 景 広 作曲

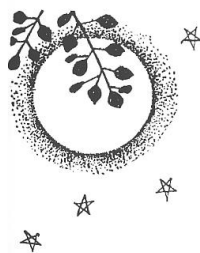
Am Dm E7 Am E7 Am E7 Am Cm Am E7 Am E7 Am

わかいふたりー のー おもいでにじむ ほうぜんじ
つきも みれんなー じゅうさーんー や
ほうちやう いっー
ぼん さらしにまいー て たびへでのー もー
いたばの しゅぎー う まってて こいさん
かなしい だろが あー

Am E7 Am E7 Am

わかいふたりー のー おもいでにじむ ほうぜんじ
つきも みれんなー じゅうさーんー や

1 庖丁一本 さらしに巻いて
旅へ出るのも 板場の修業
待ってて こいさん
哀しいだろが
あ、若い二人の
想い出にじむ 法善寺
月も未練な 十三夜
(台詞)
こいさんが、わてをはじめて法善寺へつれて来て くれはつたのは「藤よ志」に奉公に上った晩やっ。はよう立派な板場はんになりい云うて、長いこと水掛不動さんにお願いしてくれはりましたな。あの晩から、わては、わては、こいさんが好きになりました。
2 腕をみがいて 浪花に戻りや
晴れて添われる 仲ではないか
お願い こいさん
泣かすにおくれ
あ、いまの私には
親方はんには すまないが
味の暖簾にや 刃が立たぬ



3 意地と恋とを 庖丁にかけて
両手あわせる 水掛不動
さいなら こいさん
しばしの別れ
あ、夫婦善哉
想い出横丁 法善寺
名残りつきない 灯がうるむ
(台詞)
死ぬ程苦しかったわてらの恋も、親方はんは許してくれはった。あとはみっちり庖丁の修業をつんで一人前の料理人になることや。な、こいさん、待っててや、ええな、こいさん。

